

ジッド『パリュード』のプレオリジナル：「ル・クーリエ・ソシアル」と「ルーヴル・ソシアル」

吉井，亮雄
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/9963>

出版情報：Stella. 14, pp.99-116, 1995-03-30. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン：

権利関係：



ジッド『パリュード』のプレオリジナル ——「ル・クーリエ・ソシアル」と「ルーヴル・ソシアル」——

吉 井 亮 雄

『パリュード』(全6章)の初出誌としては、一般には以下のものがよく知られている。すなわち、巻末の「跋詞」を掲載したベルギーの「ル・レヴェイユ」1894年10月号、第1章を掲載した「白色評論」1895年1月号、そして第4章の抜粋を掲載したベルリンの文学誌「パーン」の「フランス語版付録」同年6-7月号である¹⁾。だがジッドは、この3誌のほかにも作品の抜粋を「ル・クーリエ・ソシアル *Le Courier social*」「ルーヴル・ソシアル *L'Œuvre sociale*」という、いずれも短命に終わった2つの小雑誌に発表していたのである。もっとも、それらの存在はまったく指摘されていなかったわけではない。前者はすでにイギリスの書誌学者ピーター・ホイによって同定されていたし、後者についてもジャック・コトナン作成のジッド著作書誌が、未確認の情報とことわったうえで、誌名と刊行年月を記述していたからである。しかしながら、掲載テキストそのものにかんしては以後もなんら具体的な検討はなされていない。それどころか筆者の承知するかぎり、ホイの指摘は今日までジッド研究者の知見から完全に漏れたままであるし、コトナンの推定にしてもいまだに実証的な確認をうるにはいたっていないのである。さいわいにも両誌を参照したのを機に、本稿ではまず掲載誌とその周辺について略述しながら正確な出典の確認ないし再確認をおこなう。ついでプレオリジナルとしての性格を考察したうえで、初版以降の主要各版との異同を一覧としてかかげる。

1. 「ル・クーリエ・ソシアル」

『パリュード』の初出誌として「ル・クーリエ・ソシアル」の存在を指摘したのはピーター・ホイであると述べたが、詳しくいえば事情は以下のとおりで

ある。ジャン＝ミシェル・プラスとアンドレ・ヴァスールの編纂になる『19世紀および20世紀の文学雑誌・新聞の書誌』（第3巻で中絶）は同時代の文学史研究に不可欠の文献だが、1973年に刊行されたその第1巻が「ル・クーリエ・ソシアル」にも一項をさき、注の末尾に「ホイによれば、〔同誌掲載の〕『パリュード』のプレオリジナルがジッドの書誌作成者によって指摘されたことはいち度もない」と短く記したのである²⁾。にもかかわらず以後もこの注記が現在まで20年以上にわたってジッド研究者から無視されてきたことは上述のとおり。ちなみに同誌は参照がきわめて困難な希少雑誌で、フランス全土の公共機関におさめられた定期刊行物のコンピュータ検索ソフト「ミリアード」の最新版でも検索にたいしてヒットしない³⁾。筆者が参照したのはミシガン大学ハーラン・ハッチャー・グラデュエイト・ライブラリー所蔵本からの原寸大フォトコピーである。

「ル・クーリエ・ソシアル」はアンドレ・イベルス André Ibels という青年詩人が、パリ・サン＝ジャック街の自宅に本拠をおいて半月ごとに編集・発行した、誌名が示すように社会主義的傾向を標榜した雑誌である。第1号（1894年11月1-15日）のみ12頁立てで、以後は8頁立て（版型は24.5×33センチ、組版は各段71行の2段組）。頁付けは通号である。第3号までは冒頭にアンドレの実弟で画家のアンリ＝ガブリエルによる挿絵をかかげる（このため正式誌名は末尾に「イリュストレ」を付す）。「哲学・芸術・科学」の諸領域をカバーすることを目指して、寄稿者にエマニュエル・シニョレ、ポール・アダン、サン＝ポール＝ルー、リュシアン・ミュルフェルト、ロラン・タイヤード、メシスラス・ゴルベールらを数えながらも、結果的にはわずか2か月、第4号（12月16-31日、第29-36頁）であっけなく廃刊となったのだが、この最終号に『パリュード』からの「断章」3点が2頁（第31-32頁）、1段半にわたって掲載されているのである。これは第3章、第4章および第6章からの抜粋で、それぞれに「スタニスラスの演説」「ヴァランタン・ノックスの演説」「ティティルの日記の一節」と小題が冠せられている。そのうち「スタニスラスの演説」は、初版および第2版には採られるものの以後は一貫して削除されることになる部分からの抜粋である。印刷について付言すれば、他の掲載作品はさておき、少なくとも『パリュード』にかんするかぎりテキストには誤植や脱落が散見し、そうとうに杜撰な仕事という印象をまねかれない。その大半は

植字工の不注意や原稿の誤読に起因すると思われるが、同時にジッドが自筆原稿の段階でしばしば犯す綴り字の誤りと同一のものも認められる。いずれにしても作家自身が校正に関与していないことはほぼ確実といってよからう。

創刊号の準備に追われるイベルスが10月6日、象徴派の総帥マラルメに宛ててあわただしく寄稿を請う書簡をおくったように⁴⁾、ジッドのばあいにも若き編集者は第3者を介さず直接に原稿を依頼したのだろうか。両者のあいだの書簡が1通も確認されていないために残念ながら判然としない。この点にとどまらず本件にかんする実証的な資料は皆無にひとしいのだが、ただひとつの例外として雑誌刊出が間近にせまったことを契機に発せられたジッドの証言が残されている。ミシェル・ボロレ旧蔵書の競売目録（1954年）に断片的に活字化されたピエール・ルイス宛書簡がそれだ――

『パリュード』から抜粋（!!!）したヴァランタン・ノックスの演説が「ル・クーリエ・ソシアル」の次号に載るので、エロルドがそれを読んでどのように思ったかをばくに教えてくれたまえ——というのはそこでは、もはやロランに顎髭がなくなったかぎり躊躇することなく彼を抹殺できることが（遠回しな言い方でだが）証明されているからだ。⁵⁾

この書簡には日付が記されておらず、クロード・マルタンが作成した『アンドレ・ジッド書簡総年表』の旧版ばかりか、網羅性を高めた非売版新版（1991年、15部限定）でも依然収録から漏れているのだが、「次号掲載」という記述から1894年12月前半のものであることはまちがいない。

ただし内容については若干の説明が必要だろう。いうまでもなく『パリュード』は、前年の11月から半年間におよぶ北アフリカ旅行によって自我解放の喜びを知ったジッドが、その直前まで身をおいていたパリの閉塞的な文学セナークルを容赦なく擲論し戯画化することで象徴主義との決別を宣言した作品だ。しかし同時に、かつての自分自身はむろんのこと、交流のあった実在の文学者や知識人が擲論や戯画化の対象として数多く登場するという点では極端なほどのモデル小説であって、書簡の受け手のルイスや、そこで言及されるアンドレ＝フェルディナン・エロルドも主人公の友人として、それぞれユベールやロランの名で登場しているのである。以上を前提としてことわったうえで書簡の記述に話をもどせば、ジッドはここで「ヴァランタン・ノックスの演説」と

いう断章の内容にひっかけて、実際におこったある挿話的な事件を想起させながら、当事者たちだけに通ずるやりとりに興じているのである。

具体的にはこういうことだ。まずは虚構のレベル——『パリュード』のなかで演説者ノックスは「正常さ」とはただ単に「人類の最大公約数」にすぎない、たとえそれが通常「病気」と呼ばれるものであったにせよ貴重なのはむしろ個別的な「特異質」だと説いたのち、つぎのようにつづけている——

「正常な人間とは、まさに私が先だって往来で出会ったような奴のことだ。私はその男を自分だとまちがえて、自分の名前で彼を呼んだ。そして手を差し出しながら叫んだ——〈やあノックス、今日はひどく元気がないね！ 片眼鏡をどうしてしまったのかね〉。驚いたことに、私といっしょに散歩していたロランも自分の名前で彼に呼びかけながら、私と同時にこういったのだ——〈やあロラン、どこに顎髭を落としたんですか？〉ってね。そして私たちはこの男が退屈になったので、なんら良心の呵責を感じることなく抹殺してしまった。なぜってこの男にはなにひとつ新しいものがないんでね」

いっぽうこれに先行する現実のレベルでは——。ジッドは、北アフリカで同行の画家ポール＝アルベール・ロランズとともに、ウレッド・ナイル族の少女メリアムを相手に「性本能の再教育」のための共同生活をおくったのち、夏にはスイスのシャンベルで肺結核の後遺症を癒すべく水浴療養にはげんでいた。そこにルイスとエロルドが見舞いにやってくるが、逆に2人はジッドの語る冒険談につよく触発され、みずからもメリアムをもとめて地中海をわたっていった。事件がおきたのはその後まもない8月初めのことだが、これについては『一粒の麦もし死なずば』の記述にゆずろう——

あるときルイスが「メリアムが君になにを送ればよいかとたずねている」と書いてきたので、私はためらうことなく「エロルドの顎髭」と答えた。〔…〕彼にあってはこの顎髭が、もっとも重要なとはいえないまでも、もっとも堂々とした部分を形成していた。後光のない殉教者のように、顎髭のないエロルドなど想像もできなかった。もちろん私としては、月が欲しいというほどのつもりで、ふざけてエロルドの顎髭が欲しいと言ってやったまでだ。ところが驚くべきことに、ある朝この顎髭を受けとったのだ。そう、顎髭が郵便で届いたのだ。ルイスが私のことばを文字どおりに受けとって、エロルドがぐっすり眠っているあいだにメリアムが髭を切りとり、それをルイスが封筒に入れて送ってよこしたのである〔…〕。⁶⁾

このように書簡の話題それじたいは共通の友人エロルド [=ロラン] をだしにした仲間うちの気やすい冗談として理解される。だが12月前半という執筆時期を考えれば、書簡の狙いはむしろほかにあるのではないか。というのは、翌年6月の決裂（母ジュリエットの死を契機とするジッドの絶縁通告）にむけてルイスとの関係が急速に悪化しはじめるのがまさにこのころのことであり、なによりも事態が『パリュード』をめぐるやりとりによって表面化していくからだ。詳しい経緯についてはすでに他稿で論じたので⁷⁾、ここでは概略だけを述べよう——。『パリュード』を最初に読むのは自分以外にないと確信するルイスは、スイスの寒村ラ・ブレヴィーンヌで執筆にはげむジッドに早く原稿を送れと執拗に催促していた。ジッドのほうもこの要求にいくぶんかは応えようとしたのだろう、作品全体の脱稿（12月5日）に先立ち11月中旬には第1章の掲載について「白色評論」との仲介をルイスに委ねていた。だが本当の信頼はもっぱらヴァレリーにおかれることになる。ジッドは初版の版元ラル・アンデパンダン書店との交渉はいうにおよばず、「白色評論」とのそれにかんしてさえも途中からはこの友人に頼りはじめる。しかもあきらかにルイスのことを念頭において、原稿が「君と〔ラル・アンデパンダン書店主の〕バイイとぼく以外の者の手にわたらないように」「乞う極秘」「内緒、内緒に願います」と2度にわたり要請するのである……。このように『パリュード』の完成稿をだれに託すべきかをめぐってジッドがとった綱渡りともいえる態度を思えば、問題の書簡においてもルイスとのあいだには次第に距離をおきつつ、しかし当面は作品にかかわる親密な話題によって彼の苛立ちをなだめておこうという配慮がはたらいている、そういえるのでないか。

2. 「ルーヴル・ソシアル」

本稿冒頭でふれたように、「ルーヴル・ソシアル」に『パリュード』の抜粋が掲載されたことは、ジッドの書誌学的研究で著名なジャック・コトナンがすでに推定していた。すなわち、1974年刊の『アンドレ・ジッド作品の年代順書誌』のなかで彼は「ある断章が〔同誌の〕1895年5月号に掲載されたと思われるが、掲載誌そのものは参照できなかった」と記したのである⁸⁾。だが具体的な検証はそれ以後もまったくなされていない。たとえば、1982年に

「ジッド友の会会報」の『パリュード』特集のために書誌を作成したクロード・マルタンも実証的な確認をとることができず、コトナンの記述を引用するにとどまっている⁹⁾。このたび筆者はコトナンの推定が誤りでないこと、さらに「ある断章」が作品の第2章であることを確かめることができたが、該当雑誌の参照が可能になったのはここでもまたアメリカの図書館のおかげであった。ニューヨーク・パブリック・ライブラリーがマイクロフィルムのかたちで所蔵していたのである¹⁰⁾。

「ルーヴル・ソシアル」は「芸術・社会学・倫理」を対象領域として南仏の中核都市マルセイユで発行された雑誌で、1895年2月の創刊号から6月1日の第5号までは当地出身の若き社会主義者レオン・パルソン Léon Parsons が編集を担当した¹¹⁾。第5号からは半月ごとの発行にきりかえる旨がうたわれているが、第6号の出来は実際にはひと月後の同月30日であり、早くも計画がくずれたことがうかがわれる。またこの第6号ではジョワ N. Joie (正確なプレノン是不詳) という人物がパルソンにかわって発行責任者となっている。ただニューヨーク・パブリック・ライブラリーが所蔵するのはこの号までなので、同誌が以後もつづいたのか、あるいはそこで終刊となったかは詳らかでないが、たとえつづいたばあいでも当時の小雑誌の常として——とりわけ資金・財政上の困難のために——長命であったとは考えにくい。内容についていえば、パルソンの論説(無署名)では社会民主主義の傾向がすくよくよく打ちだされている。寄稿者としてはポール・アダン、ポール・スーション、ベルナル・ラザールらが中心的な存在で、その他にはアンリ・ド・レニエ、エマニュエル・シニョレ、アンドレ＝フェルディナン・エロルド、オーギュスタン・アモンなどの名前も見える。また抜粋としてはバルザック、ランボー、ヴェルレーヌ、ゲーテ、テーヌ、フーリエ、クロボトキンなどが掲載されているが、とくにルナン、ニーチェ、ショーペンハウアー、エマーソンが複数回にわたり登場しているのが目をひく。第4号までは8頁立てだが、第5号からは半減して4頁立て(頁付は最初の2号のみ通号。また第5号と第6号には頁付はなし)。組版は大小2種類の本文活字をもちいた3段組である(1段あたりは75行から100行前後までと多様)。版型については原本が所蔵されていないので正確なところは不明だが、おそらく「ル・クーリエ・ソシアル」と同程度の大判サイズであろう(じっさい、以下に引用する書簡においてしばしば「新聞」という

呼び方をされている)。『パリュード』の第2章は、5月付の第4号の掉尾をかざる作品として、最近の「白色評論」に第1章が掲載された旨の注記とともに7段にわたって掲載されている¹²⁾。若干の誤植や脱落はみとめられるものの、印刷は「ル・クーリエ・ソシアル」と比べれば格段に正確である。この点にかんして付言すると、同じころ初版（5月5日に印刷完了）が出来まぎわであったこと、それとのあいだにテキストの異同がほとんどないこと、あるいはまた筆写の手間がはぶけるという経済性などから判断して、原稿として雑誌にわたったのは自筆稿ではなく初版の校正刷であった蓋然性が高い。

「ルーヴル・ソシアル」の誕生にはジッドも一役買っていた。『パリュード』の脱稿からわずか2か月たらずで北アフリカを再訪していた彼は、新雑誌のために旅先からいく人かの作家や詩人にたいして仲介の労をとっていたのである。以下ではそのときのもようを、すでになんらかのかたちで活字化された書簡の記述にそって見ていこう。ちなみに、これらの書簡では具体的な誌名はまったく示されていない。パルソンと「ルーヴル・ソシアル」のつながりが知られていなかったこともあって、一連の記述にかんする従来の理解は「パルソンなる人物を中心に創刊されたい雑誌をめぐる話題」という程度にとどまらざるをえなかったのである¹³⁾。

ジッドは北アフリカにわたるまえに数日滞在したマルセイユでパルソンら創刊メンバーと会っていた。このときのようなすは、3週間ほどのちに彼がベルギー人作家アルベール・モッケル（当時はパリ滞在中）に宛てた書簡（推定では2月8日執筆。この話題にかんする同者宛第2信）のなかでかなり詳しく報告されている¹⁴⁾。それによると、ジッドはマルセイユには「まったく知人がいなかったが、なん人にはその存在を知られていた」ので、温かい歓待をうけることになった。彼を迎えてくれた連中はみな若く、魅力的だった。ジッドのほうではいろいろなことを話しあうつもりでいたが、この青年たちの頭には「自分たちの雑誌、ほかのメンバーの考えることがすべて自分自身のモノローグとなるような」雑誌を作るという考えしかなかった。彼らは1年も前から計画をたて、もはや待ちくたびていたのである。ほとんど年齢もちがわないうちとあって青年たちと意気投合したジッドは「彼らがのぞむことはなんでもしよう」と約束した。ただし「自分が」寄稿することだけはべつにして。というのは、自分には手紙と本のほかはなにも書けないと思っているからだ。もっとも、そ

の本からはあらゆるもの、読者がおのぞみのものはなにを汲みとってもらってもかまわないのだが」……。そして、青年たちが作家とはだれとも個人的な面識がないというので、ジッドは彼らにかわってまず自分がしかるべき筋に手紙を書くことをひきうけたのである。

約束は守られた。マルセイユを離れてまもない1月27日、ジッドはアルジェリアのブリダからバルソンに以下のような報告を書きおけている（ちなみにこれが両者のあいだで存在が確認された唯一の書簡）——

つぎの人たちに手紙を書いたところです——ウージェーヌ・ルアール（あなた方に〔パリでの〕委託店を提供してくれるだろうと思います）、ポール・ヴァレリー（コルバシンとマラルメには彼が話すでしょう）、ジャン・ド・ティナン、モッケル（だれかひとり若いベルギー人を紹介してもらうため）、モークレール（編集にくわってもらうため）、ガッテスキ（イタリア関係のため）……。¹⁵⁾

ロシア出身でモンペリエ在住の哲学者ウージェーヌ・コルバシンとフィレンツェの詩人ロベルト・ピーオ・ガッテスキの2人が一般にはやや馴染みがうすいのをのぞけば¹⁶⁾、名前があがっているのはいずれもジッドとの関係がよく知られた人々だ。文面から見ても、具体的な人選にかんして多くはジッドがバルソンたちの意向を考慮しながら提案したものと思われる（リストからは雑誌をいくぶんなりともコスモポリットなものにしようという配慮がうかがわれるが、これは青年たちがあらかじめ立てていた編集方針なのだろうか）。

ただしヴァレリー、コルバシン、マラルメの3人についてはバルソンたちのほうから名指して紹介を求めていた。この点については、同日ジッドがヴァレリーに宛てた書簡を引用しよう——

エクスとマルセイユの青年たちが新聞（「ル・クーリエ・ソシアル」をずっとましにしたもの *un Courrier social beaucoup mieux*）を創刊する。彼らが断言するには、君は彼らにもっとも希望をあたえる人物のひとりなんだそうだ。ぼくがそんなはずはないという、ぼくの間違いだという。そこで、こういうわけだ。君の住所を教えてやったので、大きな赤いポスターを君に送ってくるだろう。おそらく手紙を添えて。君の名前をかしてやって、いつか「火曜日」の集まりのときにマラルメにうまく話をつけ、これはなぜそんなことをするのかわからないんだが……要するにこの雑誌がしかるべきものであることをマラルメにたいして保証してもらいたいらしい。……

ああ、それにまたもやコルバシンの名を求められたのだけれど、彼の名前の綴りと住所を知っているのは君だけなのだからね。

尚豊殿はレオン・パルソン、マルセイユのヴィラージュ街にいる。¹⁷⁾

全体としては新雑誌の創刊メンバーがいかにマラルメの権威を重要視していたかが伝わってくる内容だが、それにもましてわれわれの注意をひくのは冒頭文の挿入句だろう。ジッドとヴァレリーのあいだですでに「ル・クーリエ・ソシアル」が話題にのぼっていたことがうかがわれるだけではない。『パリュード』の印刷が粗雑だったのが直接の原因かどうかは断定できないにしても、ジッドが同誌にたいしてかなりきびしい評価をくだしていたことがはっきりと語られているのである。

ヴァレリーからの返書（2月4日発信）は否定的な内容であった。まず自分自身については、ただ単に実入りの少ない書き物に関心がないだけではない、「まもなく軍事省〔の文書係〕に応募しようと思っているので、社会主義の新聞に参加するわけにはいかない」、そんなことをしたら前年アナキストのテロ事件にさいして逮捕されたフェリクス・フェネオンの二の舞いになってしまう、と懸念を隠さない。またコルバシンについても、「彼をこのアパッチたちにひきわたす」ということになれば「彼がむやみに熱をあげてしまうのがいつもながら心配だ」、なぜならば「彼が書きはじめるとなると、政治的なものになるおそれがあり、そうなれば消し去られ追い払われてしまうのに毫ほどの疑いもないからだ」、とこれまた消極的であった。さらにパルソンたちももっとも強くのぞんでいたマラルメの件にいたっては、その近況報告に終始して、青年たちとの仲介については一言もふれていないのである¹⁸⁾。以後ジッドとのあいだで雑誌にかんする話題がいっさい浮上していないことから見ても、3者の参加をめぐる交渉は早くもこの時点で立ち消えになったと思われる。

ジッドのパルソン宛書簡にやはり名前があがっていたアルベール・モッケルのぼあい、事情はむしろ逆であった。「ルーヴル・ソシアル」にかんしてジッドが彼に宛てた最初の手紙は保存されていないが、それにたいするモッケルの返書（2月2日発信）によれば、ジッドはベルギー関係の通信員として若者をひとり紹介してくれと依頼しただけではなく、彼自身にも寄稿をうながしていた¹⁹⁾。これを諒としたうえで原稿料について問い合わせをしてきたモッケルに

ジッドは、すでに言及した第2信で、少なくとも当初は無報酬であろうと述べ、いずれにせよマルセイユから連絡があるはずだと答えている²⁰⁾。にもかかわらず、その後はなんの進展もなかったようだ。ひと月以上たった3月20日にモッケルがジッドに送った書簡にはつぎのような報告がある――

マルセイユの新聞の一件にけりをつけるために申しあげると、彼らはわたしになにも言ってきませんでした。それでわたしのほうも彼らがあなたに頼んでいた「若いベルギー人」を探すことはしませんでした。

新聞（エロルド宅で見ました）はおもしろいものですが、彼らはそれをわたしには送ってさえきませんでした。いっぽう、わたしのほうからはなにも伝えていないのに、彼らは寄稿者のひとりとしてわたしの名前を載せてしまったのです。そうされたからといって、わたしは自分が犠牲をはらったというよりも、共感から自分がすすんでしたような気もちでいます。いずれにしても彼らの努力はすばらしく思えるので称えてやりたいという共感の気もちでいます。²¹⁾

これらにとどまらず、名前のあがった作家たちがいずれも結局は「ルーヴル・ソシアル」に作品や論文を発表していない以上、個々の理由は不詳ながら、ジッドのはらった仲介の努力は実際にはこれといったはかばかしい成果をもたらすことがなかった、そう言わざるをえまい²²⁾。また、彼が当初みずからの寄稿は拒否する旨を明言していたにもかかわらず、同誌に『パリュード』の抜粋を委ねることになったのも、そういった不本意な経緯と無関係だったとは考えにくい。

3. ヴァリアントの提示

『パリュード』の刊本はジッドの存命中に出版されたものだけでも10点を数えるが、本稿ではプレオリジナル（略号A¹、A²）以後の異同を提示するにあたり、そのうちの4点をかかげる。このように制限をもうけたのは、初版から第3版までと『全集』に収録された第7版をのぞけば、微細な句読法の異同はあるものの各版はいずれも特定可能な先行版にもとづいて機械的に植字されたものであり、いたずらに版名の列挙をかさねるのはテキストの年代的な変化を視覚的に把握するのにかえって煩瑣であると判断したからである。

4つの刊本の特徴をごく簡略に述べておこう。1895年の初版（略号B）はプレオリジナルが直後にどのような修正を受けたかを教えてくれるテキストであり、その重要性について贅言は不要だろう。『ユリアンの旅』との合本のかたちで翌年刊行された第2版（略号C）は、初版にたいして若干のヴァリエーションを見せるばかりか、すでにふれたように「スタニスラスの演説」を含む最後の版であることからとうぜん考証資料にくみいれられねばならない。普及版として1920年にNRFから出版された第3版（略号D）はジッドが入念に細部の再点検をしたもので²³、これに準拠して21年と30年には2つの挿絵入り豪華版が、また26年には普及版新版が印刷された。ジッドがテキストの見直し作業をおこなったのが確実な最後の版という意味では、7番目の刊本にあたる32年の全集版（略号E）も無視することは許されまい。以後の各版（44年、46年、48年）は基本的にはすべてこの全集版にもとづいているからである。なおこれらのほかに、プレイアッド版収録のテキスト（略号F）をもちいてヴァリエーションの出所頁を示す。同版はジッドの没後に全集版をもとに企画・編集されたもので、作家自身はまったく関与していないのであるが、研究者の使用頻度が高いことを考慮した。あくまでも便宜的な選択である。以下、備忘をかねて各版のレフェランスを略号とともに示すと――

- A¹ : «Discours de Stanislas» (chapitre III), «Discours de Valentin Knox» (chapitre IV) et «Fragment de journal de Tityre» (chapitre VI), sous le titre «*Paludes. Fragments*», dans *Le Courrier social illustré* (Paris), n° 4, du 16 au 31 décembre 1894, pp. 31 – 32.
- A² : «*Paludes. Chapitre II*» dans *L'Œuvre sociale* (Marseille), n° 4, mai 1895, pp. 6 – 8.
- B : *Paludes*. Paris : Librairie de l'Art indépendant, 1895, 103 pp.
- C : *Le Voyage d'Urien suivi de Paludes*. Paris : Mercure de France, 1896, 291 pp.
- D : *Paludes*. Paris : N. R. F., 1920, 131 pp.
- E : *Œuvres complètes d'André Gide*, t. I, Paris : N. R. F., 1932, pp. 367 – 458.
- F : *Romans, récits et soties, œuvres lyriques*. Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1958, pp. 87 – 149.

ところで上述のように、「ル・クーリエ・ソシアル」に掲載された3つの断章のうち「スタニスラスの演説」は初版および第2版には採られたものの、以後は一貫して先行部分ともども削除された。とうぜんプレイアド版においても収録されていない。この事実はながらく指摘されていなかったが、1982年にクリスチアン・アンジュレが初版の該当部分を「ジッド友の会会報」(第54号)に再録したことで公になった²⁴⁾。したがって、この部分にかぎりプレイアド版ではなく、初版によってヴァリエントの出所頁を示す(「会報」再録テキストではつねに第211頁)。なおプレオリジナル、とりわけ「ル・クーリエ・ソシアル」掲載のそれのあきらかな誤植や脱落、ならびに各刊本の句読法やタイポグラフィーの微細な異同は、いたずらにヴァリエントの項目をふやすだけなので一覧にはかかげなかった²⁵⁾。

*

DU *COURRIER SOCIAL* À LA «PLÉIADE»

Discours de Stanislas [Fragment ne figurant que dans A¹, B et C. Reproduit dans le *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 54, avril 1982, p. 211, lignes 3-34] :

- B 52 «une génération laboure pour qu'une autre sème» A¹ et B /
coquille «un autre» dans C.
«le pain du blé» A¹ et B / «le pain de blé» C.
«leur serrer le ventre plein» A¹ / «leur rêver le ventre plein» B
et C.
- B 53 «ah! - que la pluie» A¹ / «oh! - que la pluie» B et C.
«pensant penser comme lui» A¹ et C / «pensant parler comme
lui» B.
«leurs futures mangeailles!» A¹ et B / coquille «mangeailles»
dans C.

Discours de Valentin Knox [F 120, ligne 16 - F 121, ligne 14] :

- F 120 «à ce point préférable» A¹, B et C / «à ce point enviable» D, E
et F.

- «supprimable – mais c'est parce qu'on le retrouve» A¹, B, C /
 «supprimable – car on le retrouve» D, E et F.
 «ce nom m'exaspère» A¹, B et C / «ce mot m'exaspère» D, E
 et F.
 «saisi d'enthousiasme et l'entendait parler» A¹ / «saisi d'enthousiasme parce qu'il parlait» B, C, D, E et F.
 F 121 «cet individu nous ennuyant, car tous deux Roland et moi nous pouvions de nous deux le déduire, nous le supprimâmes» A¹, B et C / «cet individu nous ennuyant, nous le supprimâmes» D, E et F.

Fragment de journal de Tityre [F 142, ligne 31 – F 143, ligne 23] :

- F 142 «À peine s'ils la trouve [*sic*] le soir» A¹ / «Ils la retrouvent le soir» B / «Ils la trouvent au soir» C / «Ils la retrouvent au soir» D, E et F.
 «pour dormir; pourtant ils la retrouve [*sic*]» A¹ / «pour dormir; ils la retrouvent» B, C, D, E et F.
 F 143 «Je vous assure que pour nous» A¹, B et C / «Je vous assure que quant à nous» D, E et F.
 «s'est placé toujours» A¹, B et C / «s'est placé dès lors» D, E et F.
 «tentaient de s'échapper du culte» A¹ / «tentaient d'échapper au culte» B, C, D, E et F.
 «Nous avons, pour le faire» A¹ / «Nous en avons, pour le faire» B, C, D, E et F.
 «nous jugions du poids» A¹, B et C / «nous jaugions le poids» D, E et F.
 «cela s'attache à vous» A¹ / «cela s'attache à nous» B, C, D, E et F.

DE L'ŒUVRE SOCIALE À LA «PLÉIADE»

- F 96 «CHAPITRE II» A² / «II / Mercredi.» B / «ANGÈLE / Mercredi.» C, E et F / «MERCREDI. / *Angèle*» D.
 «Après je compare» A², B et C / «Ensuite je compare» D, E

- et F.
- F 98 «quand je vais au Jardin des Plantes» A² / «quand il sait que je vais au Jardin des Plantes» B, C, D, E et F.
«J'allais commencer de penser» A² / «J'allais recommencer de penser» B, C, D, E et F.
- F 99 «J'allais penser à vous» A², B, C, E et F / «Je pensais à vous» D.
«je dois être au bureau» A² / «je dois être aux bureaux» B, C, D, E et F.
«Voilà l'histoire» A², B et C / «Voici l'histoire» D, E et F.
- F 100 «vous la connaissez» A² / «vous la connaissez bien» B, C, D, E et F.
«à peine installé» A², B, C et D / «à peine étais-je installé» E et F.
«elle n'a jamais voulu ; – elle m'a supplié» A², B, C, D et F / «elle m'a supplié» E.
«que je vous l'ai racontée» A² et B / «que je vous ai raconté» C / «que je vous aie raconté» D, E et F.
- F 101 «dans une médiation profonde» A², B, D et F / coquilles «une méditation» dans C et «un méditation» dans E.
«Chut! fis-je; pas maintenant!» A², B, C, D et F / «Chut!» E.
- F 102 «au bout d'un peu de jours» A² et B / «au bout de peu de jours» C, D, E et F.
- F 103 «c'était Tityre» A², B, D, E et F / coquille «Tytire» dans C.
«que j'ai des délicates choses grises» A², B et C / «que j'ai devant les délicates choses grises» D, E et F.
«les grands paysages m'attirèrent» A², B et C / «les grands paysages m'attirent» D, E et F.
- F 104 «un peu d'eau s'enfuyait» A², B, C, E et F / coquille «s'en fuyait» dans D.
«Comme j'entrais» A², B et C / «Comme j'entrai» D, E et F.
«toute l'amertume de ma phrase» A² et B / «l'amertume de ma phrase» C, D, E et F.
- F 105 «leur prendre leur temps. Ils ont pour des bijoux comme pour de la boue Tityre, la même contemplation stupide; ils amorcent leurs lignes avec des pierres précieuses pour prendre des cyprins dorés. Cela ne mord pas plus.... Mais» A², B et C /

- «leur prendre leur temps. Mais» D, E et F.
 «et père; quatre enfants» A² et B / «et père de quatre enfants»
 C, D, E et F.
 «tous les six à la ligne?» A² et B / «à la ligne tous les six?» C,
 D, E et F.
 «les événements racontés» A², C, D, E et F / coquille «événements» dans B.
- F 106 «ils font exactement la même chose» A², B et C / «ils font la même chose exactement» D, E et F.
 «dans les bureaux» A², C, D, E et F / «dans des bureaux» B.
 «pour pouvoir causer» A², B et C / «afin de pouvoir causer» D, E et F.
 «pour combler les lacunes» A² / «pour combler des lacunes» B, C, D, E et F.
- F 107 «Je voulais voir mon agenda» A², B et C / «Je voulais consulter mon agenda» D, E et F.
 «des épithètes pour *fongosités*» A², B, E et F / «des épithètes pour *fongosité*» C et D.

註

- 1) L'«envoi» final, sous le simple titre «*Paludes*», dans *Le Réveil* (Gand), 4^e année n^o 10, octobre 1894, pp.393-394; un «fragment» (chapitre I) dans *La Revue Blanche*, n^o 39, janvier 1895, pp.36-39; un «extrait» (chapitre IV) dans le *Supplément français de Pan* de juin 1895, p. 3.
- 2) Jean-Michel PLACE et André VASSEUR, *Bibliographie des Revues et Journaux littéraires des XIX^e et XX^e siècles*, Paris: Éd. de la Chronique des Lettres françaises, t. I [1973], p. 331.
- 3) たとえば、アンリ・モンドールとともにマラルメの総合書簡集を編んだロイド・ジェイムズ・オースチンも、パリ国立図書館に所蔵されていないので同誌を参照できなかった旨を記している。Voir Stéphane MALLARMÉ, *Correspondance*, recueillie, classée et annotée par Henri MONDOR et Lloyd James AUSTIN, Paris: Gallimard, t. VII [1982], pp.67-68, note 1.
- 4) Voir *idem*. ただし、結果的にはマラルメの作品は最終号にいたるまで一度も掲載されていない。
- 5) *Œuvres de André Gide provenant de la bibliothèque Michel Bolloré*. Préface

- de Robert MALLET. [Vente du jeudi 11 février 1954.] Paris: Georges Blazot, 1954, item n° 12.
- 6) *Si le graine ne meurt*, in *Journal 1939-1949. Souvenirs*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1954, p. 574.
 - 7) 拙論「知られざる版本——ジッドのルイス宛書簡集——(4)」, 『流域』第37号, 青山社, 1994年7月, 23-26頁を参照されたい。
 - 8) Voir Jacques COTNAM, *Bibliographie chronologique de l'œuvre d'André Gide (1889-1973)*, Boston: G. K. Hall & Co., 1974, p. 9, item n° 25.
 - 9) Voir Claude MARTIN [non signé], «Esquisse pour une bibliographie de *Paludes*», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 54, avril 1982, p. 225.
 - 10) ちなみに先述の検索ソフト「ミリアード」によればパリ第6大学(医学部図書館)に同名の雑誌がおさめられているが, 筆者が実際に参照したところあきらかに別の雑誌であった。
 - 11) 後にバルソンはパリに上り, 「ローロール」紙などへの寄稿を経て, 雑誌「ラ・デモクラシー・ソシアル」を創刊しアリスティド・ブリアンの政治主張を支持した。Voir Stéphane MALLARMÉ, *Correspondance*, op. cit., t. X [1984], p. 90; André SALMON, *Souvenirs sans fin*, Paris: Gallimard, t. I [1955], p. 316; Pierre AUBÉRY, *Anarchiste et décadent. Mécislas Golberg*, Paris: Lettres Modernes Minard, coll. «Avant-siècle», 1978, p. 2.
 - 12) 第3号(4月)には『パリュード』出来間近の旨が記され, それを機に同誌次号でも作品の抜粋と書評を掲載すると予告されていた。ただし, 結果的に書評のほうは掲載されずに終わった。
 - 13) 筆者の知るかぎり, あえて雑誌名を推測したのは『ジッド=モッケル往復書簡集』の校訂者ギュスターヴ・ヴァンヴェルケンユイゼンだけである。だが, マルセイユの「ランデバンダンス・レピュブリケーヌ」誌ではないかという彼の推測にしても, バルソンにはまったく言及せず, ただ2年後の1897年にエドモン・ジャルーが『地の糧』の書評を発表したことだけを根拠にするものだった。Voir André GIDE - Albert MOCKEL, *Correspondance (1891-1938)*. Édition établie, présentée et annotée par Gustave VANWELKENHUYZEN, Genève: Droz, 1975, p. 142, note 4.
 - 14) *Ibid.*, pp. 142-144.
 - 15) Fragment reproduit d'abord dans un catalogue de la librairie Les Argonautes (octobre 1976), puis dans le *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 62, avril 1984, p. 309.
 - 16) コルバシン Eugène Kolbassine は当時モンペリエのコレージュで教鞭をとっていた。ヴァレリーとの関係についていえば, 「ル・サントール」誌掲載の『テスト氏との一夜』初出テキスト(1896年)を献じられるも, ドレフュス事件にたいする見解の相違からやがて仲たがひ。彼への献辞も『テスト氏』が「詩と散文」誌に再出

- (1905年)のさい削除された。ガッテスキ Roberto Pio Gatteschi とジッドとの関係については以下を参照——GIDE, *Journal 1889-1939*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1948, pp.61-62; Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide. De «Paludes» à «L'Immoraliste» (1895-1902)*, Paris: Klincksieck, coll. «Bibliothèque du XX^e siècle», 1977, pp.103-104.
- 17) André GIDE – Paul VALÉRY, *Correspondance 1890-1942*. Préface et notes de Robert MALLET, Paris: Gallimard, 1955, pp.231-232. 同書簡集からの訳出引用は二宮正之訳(『ジッド=ヴァレリー往復書簡 1』, 筑摩書房, 1986年)によるが, 論旨展開の必要に応じて若干の改変をほどこした。
- 18) *Ibid.*, pp.232-233.
- 19) Voir GIDE – MACKEL, *Correspondance (1891-1938)*, op. cit., pp.139-140.
- 20) Voir *ibid.*, pp.134-144.
- 21) *Ibid.*, p.146. じっさい, 「ルーヴル・ソシアル」の創刊号にはモッケルだけではなく, 本人の同意なしに名前をあげられたと思われるものが少なくない。参考までに, 寄稿予定者として編集後記に列挙された人名を記せば以下のとおり——ポール・アダン, オラス・ベルタン, オーギュスト・アショーム, モーリス・ポーブール, ヴァレール・ベルナル, シャルル・シャテル, ジョワシャン・ガスケ, アンドレ・ジッド, ポール・ギグー, アンドレ=フェルディナン・エロルド, ヘンリック・イブセン, テオドル・ジャン, ベルナル・ラザール, ステファヌ・マラルメ, カミーユ・モークレル, オクターヴ・ミルボー, モーリス・メーテルランク, アルベール・モッケル, レオン・パルソン, モーリス・キヨ, アンリ・ド・レニエ, エリゼ・ルクリュ, エマニュエル・シニョレ, ポール・スーション, ロラン・タイヤード, ポール・ヴァレリー, P・ヴィエルジュ。
- 22) なお, 名前があがったその他の作家のうち, ウージェヌ・ルアールとカミーユ・モークレルについては, 2月8日付ルアール宛ジッド書簡(パリ国立図書館蔵)および2月12日付ジッド宛モークレル書簡(パリ大学附属ジャック・ドゥーゼ文庫蔵)がこの話題に関連するものと推測されるが, 残念ながら筆者は未見。またジャン・ド・ティナンについては, 紛失をまぬかれた少数のジッド宛書簡(たとえば1月27日付や3月9日付)がすでに活字化されているが, そのなかには「ルーヴル・ソシアル」にふれたものは一通も見あたらない(voir Claude SICARD, «Jean de Tinan et André Gide, une amitié à sens unique», *Littératures*, n^o 9-10, printemps 1984, pp.209-223)。
- 23) このときにジッドが修正をほどこした校正刷(初校)が1991年にパリで競売にかけられた。それまでまったく内容が知られていなかったものだけに, 以下に競売目録の記述を原文で引用しておこう(ちなみに冒頭部で名前のがるマリウス・ミシェルは典雅なモザイク装丁によって一時代を画した著名な装丁家)——
«GIDE (André). PALUDES (*Paris, N. R. F., 1920*). In-16, maroquin brun janséniste, jeu de filets intérieur (*Marius Michel*). / Épreuves corrigées par

André Gide de la seconde édition [*sic*, pour la troisième édition]. / Ces corrections sont pour l'essentiel d'ordre littéraire et tendent à alléger le texte. / Outre la suppression du sous-titre *Le Traité de la contingence*, de nombreux passages du texte ont été biffés : phrases, paragraphes, parfois même une ou plusieurs pages entières. On trouve en particulier, d'importantes suppressions dans les chapitres *Le banquet* (p. 66. 67. 68. 69. 71. 72) et dans *Hubert ou La Chasse au canard* (p. 97) ainsi que de légers remaniements de phrases n'altérant pas le sens du texte, et certains changements de mots. / On trouve également quelques corrections typographiques et des indications de mise en page et, sur le premier feuillet préliminaire cette note de Gide : *Nouvelles épreuves. S. V. P.* signé et datée du 22 Août 20.» (*Bibliothèque du Professeur [Jacques] Millot. Vente du 15 juin 1991 à l'Hôtel Georges V à Paris, item n° 251*).

- 24) Voir Christian ANGELET, «Quelques pages oubliées de *Paludes*», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 54, avril 1982, pp. 207 – 211. ただしアンジュレがその解題で、この断章が採録された刊本は初版のみとしているのは事実誤認である。
- 25) さらに付言すれば、以下のヴァリエント提示は『パリュード』第1章についてプレオリジナルからプレイアッド版までの異同を示したクロード・マルタンの表記方法にはほぼ準拠している。Voir Claude MARTIN [non signé], «De *La Revue Blanche* à la “Pléiade” : notes sur le texte du début de *Paludes*», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° précité, pp. 231 – 232.